みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ガイダンス : 第1部

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008301

ガイダンス —— 第１部

上羽　陽子
（国立民族学博物館）

第１部では，「博学連携への扉」と題し，博物館と学校との協働による教育活動について論じている。論考は，「博学連携教員研修ワークショップ」の基礎となった国立民族学博物館の共同研究「国立民族学博物館を活用した異文化理解教育プログラム開発」（研究代表者：森茂岳雄，2003年度～2004年度）の中核メンバー，田尻，森茂，中山，中牧によって構成されている。

田尻論考で指摘しているように，日本での学校による博物館の活用および学校と博物館との連携の歴史はさほど古くない。国立民族学博物館（以下，民博）においても，学校教育との関わりは1999年以降のことであり，未だそれが組織的に定着していないことを森茂論考および中牧論考で明らかにしている。「学校自体が，博物館の活動を学校の教育活動にどのように位置づけるかというビジョンやノウハウを持ち得ていない（田尻論考）」ことや，「博物館の展示と学習指導要領の内容との対応を示した取り組みはまだ少なく，今後の実施が期待される（田尻論考）」ことが要因と考えられる。

現在の民博は，1999年から実施してきた教育活動によって土壌作りと種まきを終えた状態であるといえる。その軌跡は森茂論考にて詳細に紹介されている。アウトリーチ教材や，展示関連イベント，ワークブック開発，学習プログラムの開発など，これまで民博が幾多もの学校教育への取り組みを試みてきたことがわかる。これらの経緯から「博学連携教員研修ワークショップ」が生まれ，10年にもわたる期間，日本国際理解教育学会との共催によってワークショップが進められてきたのだ。

第１部の４つの論考では，それぞれの視点から重要な指摘がなされている。森茂論考では，学校教員と民博研究者との「学習の知（意図）」の異なりによる，それぞれの活動や思考のずれによる衝突をどのように埋めるかについて新たな議論を提示している。また，民博での教育実践をふりかえり，教育の公共人類学の実践であるとも指摘している。

中山論考では，現在，過剰に氾濫している「ワークショップ」の本質や問題点について，民博での経験をもとに，教師や研究者といったそれぞれの立場で参加者・ファシリテーターになった際の具体的な事例をあげながら明快に論じている。

さらに，本書の特色のひとつは，中牧によるマネジメント論である。すでに2000年には学校との連携を可能とする体制を民博として検討する必要性があることは森茂論考で指摘しているが，それに応えるように，10年間のワークショップ運営を支えてきた当事者として，中牧論考では，その体制づくりに必要不可欠なマネジメントに対する新たな議論を提示している。今後，民博主導で博学連携を進める上で，民博側の支援体制を早急に整える必要があることが指摘されており，大きな課題を提起している。